

Title	フォンターネの『返すよしなく』：「男らしさ」と「女らしさ」の相剋
Author(s)	赤木, 登代
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1999, 33, p. 57-69
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/47880">https://hdl.handle.net/11094/47880</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## フォンターネの『返すよしなく』

— 「男らしさ」と「女らしさ」の相剋 —

赤木登代

### はじめに

テオドーア・フォンターネ (Theodor Fontane) は、この長編小説『返すよしなく』 *Unwiederbringlich* を1891年に雑誌『ドイチェ・ルントシャウ』 *Deutsche Rundschau* に発表した。<sup>1)</sup> 彼はこれを他の作品、たとえば『エフィ・ブリースト』 *Effi Briest* (1894) や『不貞の女』 *L'Adultera* (1880) と同じく、実際に起きた事件に着想を得て創作した。そのテーマは17年間連れ添った一組の夫婦が夫の不貞をきっかけにして離婚に至り、一度は復縁するも妻の自殺という悲劇で幕を閉じる物語である。これは男女関係のもつれをテーマとしていることから、フォンターネの得意とするいわゆる「ベルリン社会小説」 *Berliner Gesellschaftsroman* に属するといえるが、その舞台は実際の事件がドイツ国内で起きたにもかかわらず、デンマークとシュレスヴィヒ地方という外国に設定されている。<sup>2)</sup> しかも時代背景は1859年になっており、当時の読者から見て少し過去に置かれている。<sup>3)</sup>

この小論では、この作品をひとつの「結婚小説」 *Eheroman* として、その結婚の有り様と崩壊をジェンダー論の視点から考察していく。その際、作品に描かれた地域や時代状況は、舞台がドイツから外国に移されているものの、やはり作者が生活し、そして作品の主な読者がいるドイツ、とりわけベルリンの社会状況を反映していると考えられる。そこで、作品発表

時、つまり19世紀後半のドイツの上流階級（貴族および上層市民階級）の結婚をめぐる歴史的状況に注目し、論を進めていくことにする。<sup>4)</sup>

## 1 対立する夫婦

この小説の主人公はシュレスヴィヒ地方の海辺の城ホルケネースに住むホルク伯爵とその妻クリスティーネである。結婚後17年が経過しており、最近では二人の間に意見の相違が目立つようになってきている。

ずいぶん前に二人を結びつけた心からの愛情は続いていた。そして時には教育や宗教の問題で意見の相違に至ることはあっても、家庭内の平和をひどく脅かすようなことはなかったのだ。子供たちが大きくなってからというもの、最近ではもうもちろんそんな意見の違いには事欠かず、これも伯爵と伯爵夫人の性格の違いを考えてみると不思議はないのであった。ホルクは善良ですばらしい人だったが、人並みの能力しか備えておらず、より高い資質に恵まれた妻にはかなり見劣りがした。これはまぎれもないことだった。しかも、そのことをホルク自身が一番よくわかっており、またそれが不愉快で気詰まりなのであった。そして、まさにクリスティーネの美德に苦しめられて、もう少し優秀でない妻を望むようになっていた。(572)

この夫婦の意見の相違は教育、宗教、そして政治問題にいたるあらゆるところに及んでいる。まず、教育では彼らの2人の子供、娘アスタ（16才）と息子アクセル（まもなく15才）の今後をめぐるものである。<sup>5)</sup>ホルクは教育というものの効果をあまり信じておらず、子供は家庭で愛情につつまれていればそれでよいと考えている。しかし、クリスティーネは自らの「人は楽しみや喜びのために生きるのではなく、義務を果たすために生きる」(615) という信条に従って、親の義務として人格形成に一番大切な時期に

最良の教育環境を整えようと、それぞれの子供をふさわしい寄宿学校に入れようと考えている。

どうしてかはよくわからないが、おまえはここホルケネースでは私が何か言わなくてはいけないように思い込ませたいんだな。なあ、クリスティーネ、おまえは私よりずっとしっかりしているだけじゃなくずっと利口でもある。だが、誰がここの主人で、誰がここを動かしているかわからないほど馬鹿なわけでもないさ。(602)

ここでは、教育に関する意見の違いが問題なのではない。むしろ、妻が子供の教育についてひとり判断し、夫を自分の決定に従わせようとするのが夫をいらだたせている。つまり、妻が夫より分別があり賢いと自認することが、妻に対して優越しなければならぬという夫の「男らしさ」を傷つけているのである。

また宗教に関しても、同じルター派の信仰をもっているものの、夫妻の立場は違っている。この時代に女性の美德とされた信心深さをクリスティーネは体現しており、神学校の校長シュヴァルツコッペンをして「キリスト教徒の女性が持つあらゆる長所」(597)を持っていると言わしめる。しかし、彼女には「それで古ルター派、敬虔主義、そして、それはヘルンフト派でないものはまず全部邪教なんだ。」(593)と兄アルネが指摘する不寛容などところがある。<sup>6)</sup>特に彼女が夫に対して一族の納骨堂を建てようと提案する際に夫婦の緊張は高まる。もともと建築には興味のあるホルクであったが、クリスティーネが信仰、教会、墓などむしろ死後の世界に関心を示すのに対して、「彼はただこの瞬間のことだけを考えて、これからのことは思わないのです」(575)という現世主義の彼は同じ出費なら家畜の管理に向けたいからである。ここでも、夫は「男」の分野である仕事に、妻は「女らしい」信仰に関心を向けるという性別による性格づけが行なわ

れている。そして、彼女が自分の「正しさ」をあまりに強調することで、またしても夫の男としての誇りを傷つけてしまう。

また政治問題ではこの舞台となっているシュレスヴィヒ地方（1859年）の置かれた状況を夫婦二人が代表するという構造になっていることを、シュテファン・ブレッシン Stefan Blessin はこの作品を歴史的、政治的な視点から分析することによって明らかにしている。<sup>7)</sup> ホルクはデンマーク宮廷の侍従として老王女に仕えており、いきおい親デンマーク派である。ただし、シュレスヴィヒ・ホルシュタインが完全にデンマークに併合されるのではなく、その自治を守りながら同君連合としての立場を守るという方向である。一方妻の方は夫がデンマーク宮廷に出仕するのを快く思っておらず、シュレスヴィヒもドイツ寄りの立場での独立をよしとしている。しかし、クリスティーネは当時の多数のシュレスヴィヒ人と同じく、あくまでプロイセンではなく「ドイツ連邦」*der Deutsche Bund* により解放されることを望んでいるのであり、のちに歴史的事実となるプロイセンによる併合には大反対なのである。さらに、夫妻のこのような政治的思想の違いは領土の所属よりもむしろそれぞれの国の持つ倫理的な傾向において二人を反目させるものである。

ある日には私があなたから見れば道徳的に厳しすぎるとか、また別の日には自分の信条にこだわりすぎるとか、その次にはプロイセン的だとか、そして、また別のときにはデンマーク的なのところがなさすぎてことですわね。私はそのどれにも該当しませんけど。(619)

クリスティーネは兄の自分に対する非難に反論しているが、ここでいう「プロイセン的」あるいは「デンマーク的」という言葉は、夫妻の性格を対立するシンボルとして表すものなのである。

「ドイツはけっこうですが、でもプロイセンになってはいけません。私はいつでもれっきとしたシュレスヴィヒ・ホルシュタイン人なので、すから [……]」(590)

クリスティーネは政治的にはプロイセンを支持していないと強調するが、彼女の信条である「義務と信仰」はプロイセンと結び付けられる。

「[……] そして、プロイセンではすべてが根ざしているのは…。」「義務だな。」とアルネが口をはさんだ。

「そう、義務と信仰にね。たとえ、それが言い過ぎにしても、少なくとも古いルターの教理問答書に根ざしてはいますわ。彼らはいまだにそれを守っていますもの。[……]」

「そして、その他のところではこの世から消えてしまった。」とホルクは笑った。(589f.)

彼女はここでプロイセン的なモラルを信奉することを明確にするのと同時に、デンマークにおけるモラルの退廃を暗に皮肉っているのである。彼女にとってデンマーク、とくに宮廷のあるコペンハーゲンの空気は相容れないものである。

「コペンハーゲンではすべてが現世のもので、すべては享樂と官能への奉仕なのです、これには力などありません。」(590)

作品中にも繰り返し言及されるように、コペンハーゲンでは王自らが二度離婚し、この頃は帽子屋の娘ダンナー伯爵夫人と身分違いの結婚をしていた。クリスティーネはその支配者が率先して階級社会の秩序を破ることで風紀を乱し、下々の者もそれにならって遊び惚けている墮落した町として嫌悪をいだいているのである。しかし、侍従としてその宮廷に勤めるホ

ルクは、この町を「わが愛するコペンハーゲンの人々には」(606)と表現し、そこで過ごすことを好んでいる。アンティエ・ハルニッシュ Antje Harnisch はこの夫婦の性格を、夫が宮廷貴族のモラルを、妻が市民モラルを体現し、対立するモデルを形成していると述べているが、<sup>8)</sup> より正確に言えば、夫はその二つのモラルの間を揺れ動いている存在である。

市民であるフォンターネは、自分の両親の離婚に関して性格の不一致をその理由として挙げているが、<sup>9)</sup> 貴族の結婚においては本来身分の釣り合いこそ結婚のもっとも重要な要素であった。この物語において貴族の夫婦の愛情が問題になっていることは、19世紀における貴族の市民化の現象に他ならない。すなわち、貴族階級であっても恋愛による結婚と愛情ある結婚生活こそが理想とされるようになってきていた。<sup>10)</sup> だが、実際にはそれは二重規範であり、男女間に対等な関係に基づく愛情があったわけではない。夫婦における男女の役割は社会的に規定されており、あくまで女性は男性に従わねばならなかった。<sup>11)</sup> 兄アルネはクリスティーネが信心深いところから、神学校長シュヴァルトツコッペンに妹の説得を依頼するが、そこにも性別による役割分担が表れている。

[[……] あなたは私の妹に影響力がおありだから、聖書の立場から説得し、いくつかの章句を引き合いに出して証明してやってほしいのです。このままではうまくいかないし、すべては独善にすぎず、本当の愛とは謙虚さの仮面の下のみに現われる高慢さとは何の関係もないものであると。言い換えれば自らが変わって、家庭を夫にとって不快なものにするのではなく、彼の意に従うようにしなければならないと。  
[……] (596)

周囲の忠告を聞いても、クリスティーネは自分の何が夫の誇りを傷つけているのかまったく理解できない。彼女は自分なりに社会の要請する「女

らしさ」を守っていると信じているからである。

「彼の愛すべき性格」と彼女は繰り返した。「ええ、彼はそれをもっていますわ。多すぎるくらいにね、愛すべき性質というのが多すぎるってことがあればですけど。それに、実際彼はひとりの男性としては理想ではないかしら、もし理想ってものを彼がもっていればってことですけどもね。[……]」(575)

この夫婦においては意見の相違が直接的な対立を生み出すのではない。あらゆる点で妻が自分は正しいと自認し、優越性を感じ、それを夫の前で隠そうともしないことが夫の家長としての、つまり男性としての名誉を傷つけてしまうことこそが問題なのである。またアルネは二人の夫婦の始まりをこう述べている。

彼はつねに妻に対して二番手にいることに慣れてしまったのだ。当然のことだ。まず、彼女の美貌に魅入られ、(彼女は実際とても美しかったし、それはいまもそうなのだが)それから、彼女の賢さ、あるいは彼が賢さと見なしたものに感銘を受け、そして次に、ひょっとしたらこれが一番だったのかもしれないが、その敬虔さにひきつけられたのだ。(595)

クリスティーネはその属する社会が要求する「女らしさ」、つまり「美しさ」、「賢さ」<sup>12)</sup>、「信心深さ」をすべて兼ね備えた女性である。しかし、それが「あらゆることは度を越すと悪なのだ」(619)とアルネが指摘するように夫を見下す結果を招いている。夫にとっては妻は「氷山」(772)のように冷たく立ちふさがる存在に思える。そして、その度を越した「女らしさ」が「彼の弱い、見栄っぱりなところ」(618)を持つ「男らしさ」を傷つけることになるのである。男は家庭で二番手にいることには



耐えられない。家長でなければならぬからだ。個人をとりまく社会が要求する「男らしさ」と「女らしさ」を守ることは、アイデンティティに関わる問題である。それゆえ、この「男らしさ」を傷つけられることはたいへんな衝撃であり、またそれを守りぬくことが男性にとっての存在価値であるゆえに、ホルクはその存在をかけて支配できない妻からの解放を願うのである。<sup>13)</sup>

## 2 「男らしさ」と「女らしさ」の相剋

ホルクがデンマークへ出発するところから、物語は後半に入る。プレッシンがホルクのその流されやすい性格を「釣り人」にたとえているように<sup>14)</sup>、コペンハーゲンの空気にとらわれていく。そこで彼は異なるタイプではあるがその町の雰囲気体を現している二人の女性に誘惑される。まず一人目は間借りしているハンゼン未亡人の娘ブリギッテである。「彼女は同じシンプルで軽い素材からできた上着とスカートを身につけていたが、しかしすべては効果を考えて、うまく計算されていた。」(638)と語られるように、その服装やしぐさで、どうすれば男性の欲望を喚起できるかを常に考えている女性である。そして、小市民ながらも当時の王妃が帽子屋の娘から上昇したように、市民的モラルを無視して貴族との関係を持つようとしている。彼女に対してホルクは「とても美しい人だ。だが、不気味だ」(638)と興味を持ちつつもその誘惑に警戒している。次に彼は宮廷の王女のもとで、新たに侍女となったスウェーデン人のエッパ・フォン・ローゼンベルクと知り合う。語り手は彼女のことを「若いブロンドの女性、美しい肌でスタイルもいいが、しかし、顔立ちはまだあまり整っていない」と評している。ブリギッテが肉体を誇示することによって性的な魅力で明らかに誘惑するのに対して、エッパはその会話でもって彼をからかい、挑発しつつ大いに刺激する。彼女は後に男性としては不能ながら大金持ちで

ある英国貴族と金銭目当ての結婚をする女性である。

ホルクは結局エッパに恋するのであるが、彼女を選んだのはどうしてだろうか。<sup>15)</sup> それは二人の女性の性格の違いではなく、その身分の違いによるところが大きいと考えられる。ブリギッテは小市民であり、エッパは貴族である。つまり、ホルクは「系図学」(659)を趣味としており、また「一族の存続と神の作られた世界秩序を緊密に結びつけることを決してためらわない極端な貴族主義者」(660)であるところから、貴族であるエッパに恋してしまったのである。そして、それを単なる浮気で終わらせず、妻と離婚し、彼女と結婚することをも考えた。ここに彼の揺れ動く価値観が看取れる。ヴァルター・ミュラー＝ザイデルは、ホルクのことを「フォンターネはこのロマンにおいて中途半端なタイプの主人公を真実らしく語ることに成功している」と述べている。<sup>16)</sup> これは物語中でエッパ自身が「彼はシュレスヴィヒ・ホルシュタイン人です [……] ドイツ人は宮廷人ではない」(655)と最初からドイツ人としてのホルクの不粋さを非難し、さらにきっぱりと彼を拒絶する場面でも、「良き夫としての素質」(787)を備えたホルクはそこから逸脱するのは間違いであったと指摘していることである。すなわち、ホルクは市民的モラルをもって妻とホルケネースで暮らしながら、一方でデンマーク宮廷のモラルにも憧れを抱いていた。そして、エッパとの結婚を考えることで、恋愛結婚というドイツの市民的な考えを、浮気こそが粋と見なされるようなコペンハーゲンの宮廷社会に持ち込んでしまったのだ。

この二つのモラルを揺れ動いたホルクにはまた貴族および上層市民社会の命ずる「女性を信奉するとみせかけて、自らの支配下に置く」という「男らしさ」の二重規範がひそんでいる。揺れ動きながらも、彼はこの女を支配する者としての「男らしさ」のイデオロギーを守ろうとしているのである。

離婚後、二人はやがて周囲の人々のとりなしによって再婚することになるが、クリスティーネはすぐには承諾しなかった。彼女の説得に功があったのは、牧師ペーターゼンと神学校長の二人である。これは、つまり彼女にとって結婚とは神の恩寵であり、キリスト教倫理を守る義務に関わる問題であるということを示している。<sup>17)</sup>

フォンターネの他の作品、たとえば『エフィ・ブリスト』では、妻の不倫が夫の名誉を傷つけ、夫はその名誉を愛人との決闘と離婚という形で回復する。しかし、クリスティーネには夫の不貞によって傷つけられた名誉を回復する手段は与えられない。そして、周囲に説得されての再婚の後、いつも悩みを相談していたドブシュッツにさえ、何も打ち明けない。この彼女の沈黙は、二度まで教会に認められた結婚に不満をもつことはもはや許されないことを知っているからである。社会が女性に求める義務を守ること、言い換えれば社会の規定する「女らしさ」にあまりに忠実であろうとすることが彼女自身を自己矛盾に追い込み、果ては死にまで追いやったのであった。

## 結び

この物語では夫婦間の葛藤がテーマとなっているが、それは個人と個人の関係である恋愛を至上とする市民的倫理の理想が貴族にまで浸透し始めた現象である。しかし、そこには社会倫理が要求する「男らしさ」と「女らしさ」という規範の力が存在している。ミュラー＝ザイデルは、この結婚の破綻は性格の違いではなく時代状況が原因だとしているが、<sup>18)</sup> この夫婦の破綻は19世紀後半の社会が要求する規範の性別による違い、すなわちジェンダーによる違いが根底にあるのである。<sup>19)</sup> 言い換えれば、夫は「男らしさ」、妻は「女らしさ」の規範にとらわれ、そこから夫婦の不和、不貞、離婚、妻の自殺へと展開したのである。その際「女らしさ」はあく

まで「男らしさ」の要求に付随するものとしていわば「男らしさ」の下位に置かれていた。男性は不貞を犯しても罰せられることはない。しかし、女性は結婚前は父、結婚後は夫と共に存在することでしか社会との接点をもつことはできない。そして、成人女性のあるべき立場としての妻の座という「女らしさ」を男性によって傷つけられても、回復の手段がなかった。ゆえに、クリスティーネは自ら望まない再婚をしても傷ついた「女らしさ」を回復できなかった。以上のようにこの結婚小説は19世紀後半の緊張する政治的状況を背景に、貴族の夫婦が置かれたその性差による社会的軋轢を表現した作品といえるのである。<sup>20)</sup>

#### テキスト

Theodor Fontane: *Werke, Schriften und Briefe*. Hrsg. v. Walter Keitel und Helmut Nürnberger. Dritte, durchgesehene und Anhang erweiterte Auflage. München 1990, Abteilung 1. Bd. 2.

引用箇所は、本文中にそのページ数を括弧に入れて記した。

日本語訳には立川洋三『北の海辺』(晶文社)1998年を参考にした。

#### 注

- 1) この作品の創作過程と出版後の状況に関しては、彼の手紙と日記(1886年5月12日から1894年12月11日まで)に言及されている。特に、『ドイチュ・レントシャウ』の出版者のユリウス・ローデンベルク **Julius Rodenberg** に宛ててその題材の出所や執筆の進行状況などを繰り返し報告している。
- 2) Vgl. Theodor Fontane: a. a. O., S.985-995. フォンターネがローデンベルクに宛てた手紙(1888年11月21日付け)の中で、これは実際にメクレンブルク **Mecklenburg** のシュトゥレーリッツ **Strelitz** で起きた事件であるとして、その概略を報告しているが、後の研究者ローゼンフェルト **Hans-Friedrich Rosenfeld** はその事件の詳細を調べ、フォンターネはすでに実際の事件に脚色を加えて報告していると指摘している。
- 3) この1859年の時点では物語の舞台となっているシュレスヴィヒ地方はデンマークに属しており、隣のホルシュタイン地方と共にその領有をめぐるプロイセンと緊張関係にあった。その後1864年の両国間の戦争の後、両地方はプロイセンに併合されるという歴史的背景がある。

- 4) 19世紀のドイツにおいては富裕な市民の生活が貴族的になり、また貴族の生活が市民的なものになるという現象が起こった。
- 5) Vgl. Christa Diemel: *Adelige Frauen im bürgerlichen Jahrhundert. Hofdamen, Stiftsdamen, Salondamen 1800-1870*. Frankfurt a.M. 1998. S.31-37. 当時の貴族の子供は6才ごろから家庭教師につくのが常であったが、その教育は性別によって方針が異なっていた。ここでもアスタには女性の家庭教師ドブシュッツによって女の子にふさわしく特にピアノとフランス語を教養として身につけさせようとしており、一方アクセルには博士をめざす男性の家庭教師が住み込み、自然科学を重点的に教えている。また加えて、男らしい狩猟も父によって推奨されている。
- 6) このクリスティーネがその寄宿学校で学んだヘルンフォート派(1722年ツィンツェンドルフ伯爵により創立)というのは当時のプロテスタントの貴族に広く支持された宗派である。その教えでは感情と個人的な信仰体験、そして共同生活における規律が重視されたが、その教義においては寛容であった。
- 7) Stefan Blessin: *Unwiederbringlich – ein historisch-politischer Roman? Bemerkungen zu Fontanes Symbolkunst*. In: *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte*, Bd. 48, Hf.4.(1974)
- 8) Antje Harnisch: *Keller, Raabe, Fontane. Geschlecht, Sexualität und Familie im bürgerlichen Realismus*. Frankfurt a. M. 1994, S.163.
- 9) Theodor Fontane: *Meine Kinderjahre*. In: *Werke, Schriften und Briefe*. Abteilung 3. Bd.4. München 1973, S.18.
- 10) Vgl. Christa Diemel: a. a. O., S.37-55.
- 11) Vgl. Ute Frevert: „*Mann und Weib, und Weib und Mann*“ *Geschlechter-Differenzen in der Moderne*. München 1995. フレーフェルトは「男らしさ」と「女らしさ」の歴史的変遷を論じている。
- 12) Vgl. Christa Diemel: a. a. O., S.31-36. ただし、この「賢さ」は学問的であってはならない。
- 13) エリザベート・バダンテール Elisabeth Badinter は『XY男とは何か』*XY – De l'identité masculine* 上村くにこ・饗庭千代子訳(筑摩書房) 1992年の中でこの「男らしさ」を社会的な要求と見なし、その獲得の困難さを歴史的な経緯の中で論じている。
- 14) Stefan Blessin: a. a. O., S.689.
- 15) Vgl. Stefan Blessin: a. a. O., S.687. プレッシンはエッパがスウェーデン人であることを根拠に、この関係はホルクの抱くデンマークとスウェーデン

統一思想のシンボルであるとしている。

- 16) Walter Müller-Seidel: *Theodor Fontane. Soziale Romankunst in Deutschland*. 3. Auflage, Stuttgart 1994, S.382.
- 17) ドイツにおける結婚の歴史については、若尾祐司著『近代ドイツの結婚と家族』(名古屋大学出版会)1996年を、その法制度の変遷と世俗化の経緯を知るために参考にした。
- 18) Walter Müller-Seidel: a. a. O., S.385.
- 19) Vgl. Helgard Mahrdt: *Öffentlichkeit, Gender und Moral. Von der Aufklärung zu Ingeborg Bachmann*. Göttingen 1998. ここでは『エフィ・ブリースト』を例として、当時の性による社会的立場の差異が論じられている。
- 20) Vgl. Max Rychner: *Aufsätze zur Literatur*. Zürich 1966, S.241. リュヒナーがフォンターネにはイブセンと比較して確固たる信念や改革を奉じるようなラディカルなところはないと指摘しているように、この作品もフォンターネ自身の性別に関する考え方が現われたものではなく、当時の考えが多層的に表現されているものと考ええる。

(大学院後期課程卒業生)